

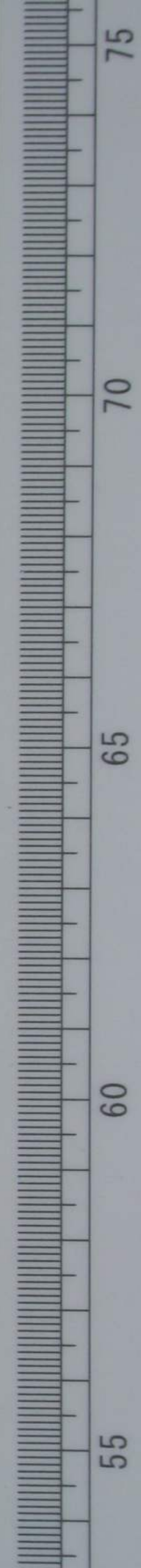
著郎三安高

高安三郎著

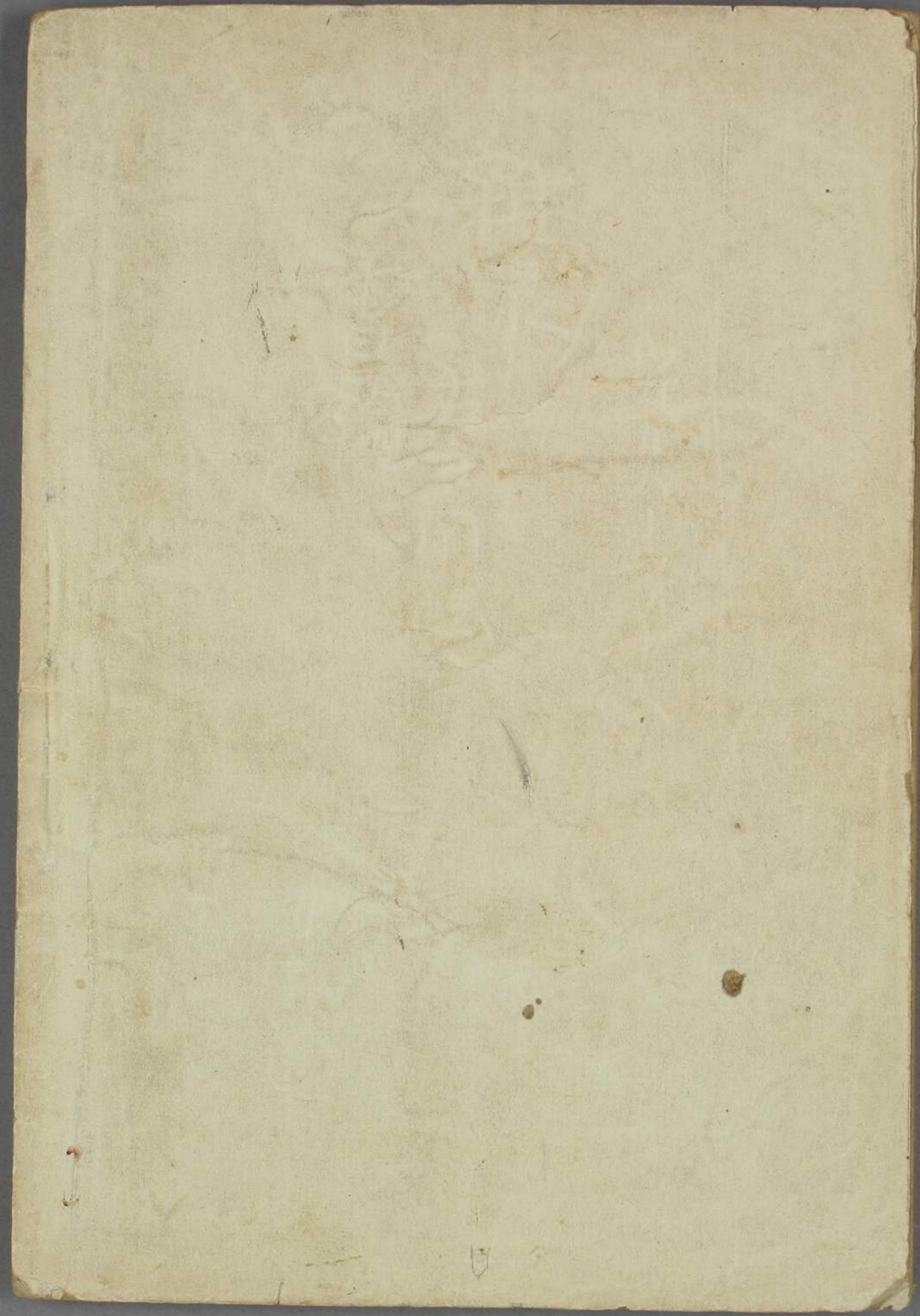
牲 犧

社主會社 物本

詩 哀









犠牲目次

第一章
第二章
第三章
第四章
第五章
第六章
第七章
第八章
第九章

死
赤兒
女
氣違か
知己
哭聲
汚まい紙
血に染た顔
曾我物語

一頁
一一
一七
二三
四三
四七
五四
六五
七三

第十章	いゝえ	八六
第十一章	何で死ぬ	九一
第十二章	運命の手	九四
第十三章	無言の命令	九六
第十四章	血	一〇〇

犠 牲

高 安 三 郎 著

第一章 死

いッそ死のふか
 數へて見れば七年前、時の執權、國重嚴道の血が此手へか、ツたのは今
 月今日。あの時迄は革命黨の一人、自由の爲に家を顧みせ身を顧みせ
 法律を恐れを筆に口に時の政府を攻撃して、果ては同志と激烈の手段
 を行なはふとまでした。が先づ顯はれて同志は捕縛、其身の危急に嚇と
 なッて當の敵國重が微行の途中、飛か、ッて一刀に仆した。それから
 意外にも心局大變、殊に我ながら不思議なはいよ、國重の息が絶へ
 た。と聞て満足した。と同時に何となく力が抜けた。やッたらばこうと思ふ

た事は何一つ出来ず、姑らく身を隠したが、僥倖にも自分の仕業といふ事は現はれなかつた。まかし實行した甲斐は更になく、政府の政略は依然同様、それに國重の爲に家を富ました屬僚や商人は多いが本人は珍らしく貧究で死後借財が残ればかり、妻子は人の家に身を寄せる事となつた。驚たのは其家が自分の後見、自分が同居して居る貝邊の家、毎日顔を見合さねばならぬ事となつた。成丈逢はぬよう、成丈聲も聞かぬようにしたが、どうしても居た、まらむ、學問研究の爲と甲斐の山寺へ這入り、一切を忘れて新にやり直さうと思つたが、豫想外に松風は過去を吹起して、半夜の鐘も彼事を呼出す。なせ忘られぬか、何物が忘れる事を許さぬかと苦悶の餘り、姑らく政事社會の事を聞かむ、政事に關する書物を見せ、僧と清談して時に宗教の書を手にしたが、生死、苦樂、善惡などの題目に出合ふ毎に直ぐ彼事を引出して、一日も忘られぬ。境の

静なるとまぎれる仕事がないので、沈思の癖は募つて、抑々何故にあんな事をやつたか、固より長い間、熟考はしたが、まだ十分極まらぬ中、俄かに激して實行したが、悔ひぬ、耻ぢぬ、主義の爲だ、自由の爲だ。まかし、あれでこれだけ自由の爲になつたか、イヤ、結果で手段を論ずる事は出来ない、只目的が國重も殺すべきほどの罪人か、況んや何も知らぬ其妻子を路頭に迷ますとは、イヤ、そんな事まで思ひやつて、大事は出来ぬ、犠牲、犠牲、犠牲なしに世は進まぬ。が已も犠牲になりはしないか。あれから丸で世間へ出て、一生此儘暮すのか、日蔭の身で終るのか。決して決して今に出る、新にやり直すと幾度か自分に言譯したが、いつまでも出て、日に物思に耽つて、更に慰むるものはなく、勇氣はますます失せるのが自分にも知れて、果てはどうしてあんな事が出来たろうと不思議に思はれた。そればかりか、人事を空として、社會を冷かに見る僧の

説に感じた譯ではないが人間の仕事がだん／＼つまらなくなつて自分にする氣は追々なくなる。人間は何の爲に生れたか人生は何ぞ死後は如何。こんな疑問が浮ひ出して宗教哲學詩賦に尋ねたが分らぬ分らぬ。古今聖賢の説く所畢竟已が目に寫つた小天地間の安心の外は茫々漠々。他人の思想に飽き果て、獨り考がへ自から思ふたがいよ／＼分らぬ。境を變へればまだ新しい考も出るかと寺を出で、東遊西行。俗鼻を撲つ處も餘所ながらのどき山水畫にも書けぬ處も見たが歲月ばかり重ねて何一つ發明せぬ再び東都へ歸て復た後見人の家に同居し人に逢はぬ外へも出ぬ内の者に物も言はぬ閉居一年五六ヶ月。爲す事なくして嘆息に日を送ると体は瘦せ色は衰へ、あはれ紅顔の美少年も早墓中の人の姿。神經ばかり鋭敏になつて夜がねられなくなり以前の事が目の前に見へて過ぎ去つた人がアリア

リと現はれる。尤も數々尤も明らかに現はれるのは國重嚴道。あの當坐もこうはなかつた。今は毎日見へる。見へかゝるとあわて、目をふさいで無理に外の物を思出さうとするが生憎に急に出ない立上つて障子を明けて庭を見たり空を見たり大騒しても無駄なのに疲れてかまわぬ見へる／＼と時々目を怒らして眞青になつて居る。「これではなせ活て居るのだらう」或日自分に問ふた。「死の恐か死の恐かイヤ已は左程死を恐れぬ。さらば何故前途に何の希望がある。講究も仕盡した沈思もし盡したそして秘密の門の鍵はまだ得られぬ得られる見込は全くない。此上は只死。死の手に鍵はあるらしい。死は罰でない救は救だ。此煩惱を此苦痛を此忘想を救ふは死」血に染む國重嚴道が齒をむき出して笑つた
飛上つて青井秋津は裏口から逃出した。頃は二月十日餘り時刻は午

前三時過銀坐の真中でも今は人通の絶へた頃、ましてこゝ、麴町。冷たい風が音もせせ顔を磨て行くばかり。地にも天にも一点の光はない。空は黒く深く高く又廣く、ギット見て居ると此身は段々縮つて消へてしまふやうな心地。宇宙の大きなのに引かへて我身の小ささ。いよゝゝ活て居る値打がないやうな。いつぞや富士の裾野で仰て見俯して視て天地を小とした事もあるのに、そんな事は思出しもせせ。

「若し死ぬとしたら、どうだろう、親はなし、兄弟はなし、親類はなし、朋友はなし、誰も何とも思ふまい猫が死でも、ツと嘆かれるだろう。寧ろ喜ぶのはあの貝邊だ。親父の死だのは巳の十の時、彼奴はあの時やうゝゝ内の執事を止めて別に商店を開いたばかりが非常に親父の信用を得て居たからと、うゝゝ巳の後見人、十萬圓の財産の管理人、ろれからまた、く間に仕上げて今では堂々たる一個の紳士だ。方々の會

社や何かに關係があるやうだが、どうしてあゝ、急に成上つたか知らぬ、よく權門へ出入するといふ事だが、そればかりではない。私は前から財産の事などは面倒だから關係せせ、いつの間、やら丁年を過ても其儘にして置たが、久しく會計の報告もせせ黙て居れば、いゝかと思つて何とも云はないのは怪しい、きつと使込で居るに違ひない、自分の物にして居るに違ひない。殊に此頃巳が引込で居るのを氣違か何ぞのやうにあつかふて不禮な事だらけだ。彼奴巳が死だら大に喜ぶだろう、イヤ年が年だから待兼て毒を食はずかも知れない。なせあんな奴を信用なすつたんだらう、まかし父様は情慾のはげしい、そして氣の大きい人だつたから、あんな細かい目先の早い人間が何かに都合がよかつたかも知れぬ。さうだ小辰、あの女も同じやうな人間だが、それに溺れる位だから矢張さうだ、が彼奴憎むべき奴だな、彼奴、小辰、汚れた身分

八
から成上つて父様を籠絡し母様が一生の不平憤恨苦痛の種となつて果ては自殺の原因——」ブル／＼と身を顛はした。「父様も殺したと謂てい、毎日酒びたしになつたのは彼奴があるからだ。たう／＼其酒の爲におなくなりなすつた——今何處に居やあがるか知らぬ聞けば父様の私生子があるといふ事、まかも已よりは五分前に出来たといふ、これだ、これが尤も母様の心配になつたのだ、自殺の原——」
自分も自殺するに定まつて居るやうな氣がして恐ろしくなつた。力なく悄悄と何處ともなく歩いたが、市が谷の門を出て橋の中程まで来て不圖見ると月が出て居た。氣のせい加力なさ、うに向の家根にもたれて居る。向の方から來る者がある。すれちがふ時に見ると骨と皮ばかりに瘦せ衰へた老人、ボロ／＼の衣服を着て、ちぎれた草履をはき、顛ひながら、よぼ／＼歩く姿、乞食か、イヤ乞食よりまだひどい。

「あれでなせ活て居るだろう、そんなに命が惜しいのか」
さういふ汝はと何處からか聲がする。立止つた。「憶病」思はを口へ出したが人に言はれた心地。見まはすと向の岸から松が堀へ指をさして、月にか／＼やく水までが引入れやうとするかの様
ツカ／＼と土手へ上つて、体を前へ傾けた。

ギヤアといふ赤兒の聲

秋津は暫らく止まつた。耳を敬て、聽たが聲はまたしない。
さては幻聽

が何かまた聞きたいやうな氣がして、姑らく耳を傾けて居た。
また聞へた。弱い細い悲しさうな苦しさうな、そして無心に出たらしい聲

秋津は胸を刺される心地。聲を尋ねて行て看ると土手と路の間の水

のない溝に赤兒が捨て、ある。月の光によく見ると生れてまだ間がないらしい。頭の毛は十分生へて赤黒い顔は締つて干物の様だ、目をふさいで死で居るのかと思ふと時々目を開いて泣く。處へ瘦せて灰色の毛に處々紅が付て居る犬がノソノソと來た。しきりに鼻でまはつたが捨兒を見て傍へ寄ろうとして秋津を見て躊躇した。のいたら直ぐ喰付さう。秋津は手早く兒を取上げた、其拍子に泣出したが抱占めると泣止んだ。暫らくギット顔を見て居たが兒は一寸目を開て秋津の顔を見て、ニヤりと笑つた。秋津も笑つた。まことに久し振の笑顔だ。懷へ入れて袖で蔽ひ元の道へ引返へしたが、死といふ念は暫らく忘れて居たのに氣が付いた。

第二章 赤兒

家へ連れて歸つた頃は早夜明。兒はまた泣出した。どうしても泣止ませ抱て部屋をウロウロしたが「これは餓に相違ない、丁度夜が明けた。もう牛乳が來る時分」いつもは手にも觸れぬ牛乳を待兼た。秋津の部屋といふのは家人の住居と庭を隔てた離座敷で、前に住だ人が此處で首を縊つたとかで久しく皆が恐れて行かぬ、修繕もしなかつたからひどく荒れて居る。いやに廣く薄暗く歩く毎に床の音がして床の間の壁は始終酷がはへて居る。椽は雑巾を當てた事がないから白くなつて猫の足跡がいつまでも其儘。庭は極狭く、奥庭との境の築山が壞れて崖の様になつて居る、其前に植木鉢の棚、玄か木は朽ちてこわれた鉢に枯れた植木がさしてあるのが五も六もうるさく置てあつて其下は土や瓦のわれたのが固まつて小高くなつて居る。一方は

高堀一方は木立其間に母屋へ通ふ小徑がある。牢の様な處だ。玄かし秋津は始の内は苦にもせせ却て母屋と離れて居るのを喜むだ。が此二三月以來かの妄想が募てからは、いやでくたまらぬやうになつたが變へやうとは思はなかつた。彼事露現の恐が此頃まだひどくなつたから。

老僕一人が膳を持って來ては掃除をするが、それもまねはどで、玄かも極稀。夜具は自分で上下する。此頃は夜よく寝ないから夜具は丸めて片隅へ押やつたまゝ。着物も帽子も本と紙とゴツチャに一方に固めてあつて机には塵が白くたまつてあるが、腕をかけて呻吟するので其跡ばかり付て居る。

長い間兒を抱て居て手が痛くなつたから夜具を延して其中へねかした。兒もつかれてか泣止だ。處へ例の老僕が膳と飯櫃を持って來たが

久しく物を思はないから向でも黙つて椽側へ置て行く。今日は併し此兒に付て何やかや頼まうと思つて居たが、言ふ間に置て行てしまつた。舌打しながら膳を取入れたが今日は牛乳がない。「オヤ忘れたのか、イヤ忘れるはづはない、今まで一日でも欠した事はないから。入らぬ時は持て來て、入る時は持て來ない。ア大方まう止めるつもりだらう、いよゝゝ虐待しやあがる。」また不快の念が起て來た。「さう思へば此飯だ、怪しいぞ。」

飯を庭へ捨て、新に付けたが矢張食はせ、汁の蓋を取て暫らく見て居たが大丈夫と思つて兒の傍へ持て行た。動きもしないから寝たのかと一寸頬へ手を當て、見ると冷たくなつて居る。死だのかとあわてて抱上げる拍子に泣出したから先づ安心して汁を吸はした。が直ぐ吐出した。困つて立上つて少し歩るいて見たが泣止まない

「ねんくよ、ねんねしな、ねんねの守はどこへ行た。」
拙ない調子で歌つて思はせ笑つた。が中々泣止まないから又飲ます
と今度は少し飲で跡は吐出す、かまはせ又一口飲ますと一寸目を開て
又ふさいで、スヤノ、ね入つた。靜に夜具の間へ入れて枕元へ座はり
ヂット見て居た。「今度彼奴が來たら牛乳をさう言て、が牛乳に毒でも
入れやしまいか。よし己が買て來やう。そして、そして己が育てやう。
ハ、ハ、ハ」颯と風が吹込むだ。「寒い火を起さう。」昨日までは少々の
寒さでも火など起した事はなかつたが
火鉢を引よせて灰を探つて看ると碁石程の埋火があつたから顔を突
込で吹たが中々起らない。「不注意だ、こんな事は彼奴がしなくツちや
ならない處だ。」母屋の方を睨むだが呼もせせ又吹た。灰ばかり立て
火は起らせ失望して火鉢を突やり脱捨て、ある着物を取て廣げて兒

の上へ着せ添へた。自分も横になつて暫く兒の顔を見て居たが、いつ
の間にやら寐入つた。

其時の夢に、廣い野のやうな處に、晝でもなく夜でもなく月の光でもな
く日の光でもなく一種白い光で一面明い中を、羽のない天人の様な女
が五、六人黙つて踊て居る。ついにないよい心持で自分も黙つて見て
居ると舞の手はだんく早くあつて、ままいには目が舞ふかと思ふ程
になつたが、また緩くなつて一列に列むだ時には眞中の女が彼赤兒を
抱て居た。その内に一人消へ二人消へ、かの女一人になつたが、女はヂ
ット兒の顔を見てさめくくと泣出した。たうく、兒を下へ置て暫く
去兼て居たが思切た様に隠して居た羽を廣げて飛で天へ上つた。自
分はツカくくと進むで其兒を取上げた。すると又今の女が現はれて
笑つた。かと思ふとパット一面赤くなつて、又消へた時には女もなく

野もなく自分と赤兒。見ると前に虫でもなく獸でもなく墓の様な物が居る。それが何ともかとも言へぬ程いやでたまらなかつた。が退きもせせ、それも動かせ、睨み合つて居る中に不意にそれが大きくなつて、見る／＼灰色の血だらけな犬になつた。ゾットして飛か、らねばい、がと思つて居ると、ギリ／＼とつめよつて来て、不意に飛付た、兒をくわへて走り出した。己れと追かけて走つたが、其早さ追ふ苦しさ。やうやう追付て尾をつかむと、ふりかへつて睨む其顔、犬でなく、國重嚴道があの時の顔。キヤツト叫で目が醒めた。暫くは只茫然。ガツカリしながら四方を見ると曇天の事とて暗い部屋が一層暗い。よもやまだ日暮ではあるまいと立て障子を明けると、奥坐敷で大勢人の笑ふ聲がする。「何だやかましい」と荒々しく閉めてふりかへつて見ると夜具がまくれてある。驚た赤兒がない

第三章 女

夜具も着物も手荒く振つたが赤兒は見へない。部屋を一まはりまわつてさがしても何處にも居ない。又障子を明けて見まはしたが朝持て來たのと膳が變つて居る。「さては誰か來たに違ひない、さうだ晝飯を持って來たのだ、その時もし——連れて行たに違ひない憎むべき奴だ」嚇となつて取かへしに行かうとする途端やつて來たのは例の老僕、見るといきなり其手を引つかむだ。

「何處へ連れて行た」いつにない大きな荒い聲で

だしぬけにやられて物が言はれ、目を丸くして居ると手を離して胸倉を攫むだ。

「さあ言へ」

いよ／＼言はれない。此方はまた力を入れて占めると眞青になつて

さも苦しうにしたから手を離して突のけて跣足のまゝ、母屋へかけ
て行た

臺所口から上る途端今奥へ銚子を持って行かうとする下女に突當ると
下女は其鈕幕に驚いて銚子を落した。あわてるのを引つかまへて

「貝邊は何處だ、貝邊は」

これも驚いて物を言はせ顔ばかり眺めて居るのでいよゝゝ怒て奥へ
踏込むだ。勝手はよく知て居る。三間通つて奥坐敷の襖を明けると
こゝは今酒宴最中

暖氣と大勢の人の息で面を打たれて秋津は一寸目がくらむだ。二つ
三つ目ばたきしてよく見ると十二疊十疊の二間を一つにして金屏風
を一列に立て両側に並んで居る客は二三十人。上坐を見ると第一席
に坐つて居るのは知て居る奴蔭井深といふ男。此男は元新聞記者で

随分盛に政府を攻撃したが、いつの間にかやら官途に就て今では某省の
高等官若手の腕利才子能辯達筆家交際家、いつかは大臣と一部の人に
評判がある。容貌も前とは變つて四角であつた顔が肥て圓くなり色も
黒くつやが出てなかつた髭まで立派に出来た。相變はらぬのは小さい
冷笑して居るやうな目と絶へせ物を言ひさうにして居る口
一目見たが不快な奴と外を見ると、知た顔はまうないが、いづれ同臭味
の人間ばかり。始めは皆も氣が付かなかつたが、いつか視線は秋津に
集まつて靜になつた

引張るものがあるので、ふりかへつて見ると貝邊得藏。暫らく見ぬ中
急に年がよつた様な髪はまだ濃いが甚しく白髪がふれた。額の皺も
深くなり多くなり、赤かつた顔の色も黒味が勝て來た。窪むだ目ばかり
はまだ光は失せぬが、一体に元氣がなくなつた様だ

「何御用ですか、今日は海産會社の集會で此席は取込で居りますから
あちらで」

むら／＼と腹が立て來たいやに落付濟して、いやに去らばつくれて、傲慢な面付なぐつてやろうかと拳を堅める其途端に目を射る一物。一番末席に坐て居る女

國重嚴道の娘霜夜

始めて此家へ來た時始めて逢たが其時はまだ十か十一碌に顔も見せ
其後二三度逢た事もあるが、一体どの女に向ても物もよく言はれねば
顔なんぞは尙更見られないのに、まして彼の娘だから勉めて避けて居
た。が今四五年振で面會、思はせ顔を見合はしたが、いつの間にかやら娘
盛になつて、玄かも其顔が見たはづがないのに見た事があるやうない
つかは見ると期して居た様な顔。細面で色は少し青く、鼻筋通つて口

元は締り過ぎ、第一意味のあるのは目。憂と情を現はして居る。着物の
柄は分らぬが、じみな寧ろ淋しい着付。これを見ると親の事を思出さ
ぬでもないが、さほど恐ろしくもなく、また恐ろしいやうな、さまりがわ
るいやうな心持で一、寸見て此方向たが、ヂツと立て居られぬ、と言つて
動きもせせ、暫く變な有様で居たが、ヤツとの事で退て次の間を通り抜
け、椽側まで來て、貝邊の事を思出した。今更歸るのもおかしい、又歸り
たくはない、と言つて此儘自分の部屋へ行ては不満足だ。不快な心持
で立て居たが、奥から來る人の足音に促がされた様に庭へ下りた。庭
下駄をはいて離坐敷へもどつたが、机の前に坐つて何か考へ出した、何
を考へるかど自分に尋ねて自分に答へられ、さうして何も手に付か
ぬ。「大きくなつたなあ」吾知らせ口の内で言て、器械的に自分の手の
筋を見たが、急に手を捨てるやうに振つた。「此手だ、あれの親を殺した

床の間の横の押入を見た。此中には彼時用ひた短刀が隠して在る。此短刀は非常に心配の種であつたのだ。其當座何處へ捨てやうと色々考へたが何處でも危いやうで、一時前の築山の壞れた中へ突込で置たが、ろれでも安心が出来ず又取出して始終持て歩るいたが二度歸てからは新聞で包で此中に置いて在る。それから此押入が恐ろしくなつて外の物は何も入れないやうにした。成丈自分に見ないやうにしたが、稍もすると目が其方へ行く。あれからは一度も抜て見せ持つのもいやがつたが、鞆から鏝から鞆から中身まで詳しく覺へて居る。忘られぬ、あの時はあわて、血の付たま、鞆へ收めて立つたが二三日立てから氣が付てよく拭たが、中身と鞆の糸に染込だ血の痕は取れなかつた。今にもあの女がこゝへ来るやうに感じて來た、來ると押入の内の刀が外

から見へるやうに思はれる、「馬鹿、そんな事が」と幾度か自分を叱つたが矢張さう思はれる。「ろれにしても矢張此處の家に居るのだなあ、まういくつだらう、母親はどうしたのか、親父がないので縁が遠いのかなあ」急に濟まないと感じて來た。一度よく逢て聞きたくなつた。「馬鹿々々何を思て居るのだ、つまらない濟だ事だ、過去の一夢だ」勉めて外の事を思はふと見まはすと誰か障子の穴からのぞいて居る。驚いてよく見ると何も無いが、たしかに今のぞいたに違ひないと障子を明けると居た國重の娘霜夜が

第四章 氣違ひ

向もまごついた様子であつたが直ぐ落付て「久しくお目にかゝりませんでした」存外馴々しく言つた

「ハイ」とまでは言つたが跡が出来る暫く黙つて「まゐこちらへ」
「御免おそばせ」

はいるまいと思つたら這入つた。机の傍へ坐つて又互に無言
秋津は身動もせせ俯いて居たが盗むやうに目を舉げて見るとデット
自分の顔を見つめて居る。また俯いて向の膝を見たが此時氣が付い
た。着て居るものは柔らかくなかつた

「本當にあなた氣違きちがひですか」

意外の間に驚いて顔を見たが向でもウツカリ言ふたものと見へて少
し顔を赤めた

「氣違——い、ね」

「でもあちらでは皆さう言つて居りますよ」

失敬な怪しからぬ、それでかうあつかうのだと始めて知つた

「それで私もお尋ね申しませんでしたでしたが先程お目にかゝりまして私
はだうもさう思はれないのですから——一寸伺ひました」言て
俯むいて霜夜は考へ出した

今度は此方からデット見つめた。顔色の悪るいといひ元氣のないと
いひ人には馴れぬ様だが落付て怯氣のない處、口は堅く閉ぢていつま
でも物を言はぬかと思はれる處、どう見ても斷ぬを苦勞に責められて
今も尙つらひ事があるのをデットこらへて居るらしい。何をしに來
たのか、只尋ねにか、用があつてか、譯が聞たい、若し只好意で尋ねに來た
のなら寧ろ失望、何とか言つて試みやう、かう思つて秋津が
「御母公はどうしてお出です」

「ハイ相變らぬ達者でございます」俯むいたま、答へた
跡は何とか言て話を續けやうと思つても生憎出ない、一体何だろ苦

勞は若し苦勞がありとすれば、あの事か知らぬとビクとしたが此長の年月立てからよもやそんな事ではあるまい其外には女といひ年頃といひ——戀婚姻イヤ母親があるないにしろ已に久々で逢た己に用のあるはずがない矢張あの事か知らぬと押入の方を見かへつたがそれなれば自分に來る譯がない言は、敵だこわいに違ひない憎いに違ひないが今見る處己に對して何の感覺もなさ、うな、寧ろ心易過ぎるやうな己を何と思つて居るのだらう、氣違、イヤさうは思はないと言つた、どうして分るだらう、非常な慧眼だ己の性質も一目で分つたのか知らぬなに、しても何用だらう、矢張婚姻戀一寸かけて見やうか、まかし何と言つて「いろく考へて「あなたまだ——御々々縁付はなさらぬのですか」さてく我ながら拙な不作法な馬鹿氣た問様若し違つたら何と思ふだらうと言つた跡で思つた

娘は別に驚きもせむ俯いて急に答へなかつたが稍あつて顔を上げて「私は一生出來なくなりました」

「エどうしてそれは」

娘は又俯いた。小さな聲で「昔の人には困りますねへ」

「ナ、何がです」

「御存じでせう」

「何も知りません此通りあちらとは丸で關係は絶て居りますから何事も聞きません」

「お心易くもないのにこんな事を申しては變に思召すでせうが私は實に」一寸秋津の顔を見て「あなた私の親父を御存じですか」

ギクと胸に應へた。矢張彼事。トキくしながら俯いたが定めて睨むで居るだらう押入の刀は見へはしないか

「御存じですか」

又一問殺したのはあなたですかと聞へる、それになせだか知らぬとは此娘に對して言はれぬ

「ハ、イ」

「では御存じでせうが、何事も昔の通りに思つて居りました。らしい氣質で自分のかうと思つた事は何でもかでも通さねば聞きませんでした。それで人にも憎まれましたか御存知の通りの譯になりましたか——」

秋津は息を止めた

「それから私共は此處の家へ同居とは名ばかりでかゝり人となりでしたが親類といふではなし、只親父に少し恩があるといふ丈でございますから始めの内は親切にもして呉ましたが長い中には追々冷淡に

なりまして其氣兼と言つたら實に——つろうございます。ですが外に知邊はなし、親父の居ります中は色々な人もまいりましたが、死にましてからは誰一人尋ねてくれるものはなく、たまにまいりますのは私の學校友達で、それと以前の様な交際は出来ませ、夜會や芝居などへ誘はれましても斷わるばかりでございますから、却てつらいやら、かなしいやら——母も始終苦に致しまして早く私が大きくなればよいと申してばかり居りました。それは親父が死にます時に、私が大きくなつて、良い縁がなかつたら宮中の女官にする様にと遺言致しましたさうです。が今以て此通りの姿でございますから母がもう辛抱がしきれないと申しまして、どうせ十分な處へは行かれないから女官になつた方が第一名譽だと申しますんですよ。母はまた氣質から何まで親父によく似まして、殊に一倍舊弊でございますから、あんな處へ行

くのは天へでも昇る様に思つて居ります。それに自分が以前一年に
一二度御所へもまいりまして餘所ながら見て居るものでございます
から、もう結構な極樂のやうな處と一圖に思つて居ります。ですから
私がまだ何とも言はない中に此處の主人と相談致しまして、これも以
前は親父が引立てた人ださうにございますが、蔭井深と申す人に話し
て見ますと此人は當時余程幅のきく人だとかで一度逢に來まして私
も逢ましたが、それから何もかも引受けるからと申して、まきりに勧め
ます。が私も少しは女官の事も聞て居りますし、あすこへまいれば一
生獨身で勤めなければなりません、それも宜しうございますが、何から
何までむつかしい儀式作法があつて、物も自由には言はれませぬ、口と
休ばかりの榮陽でございます。私は子供の時から我儘で山猿だとい
く言はれましたが、おどなく鎖に繋がれてしまひには、煮られる羊よ

り、よつばと山猿の方がよいと思ひます。そんな身分でも自由でなけ
れや面白くありませんから不承知だと申しますと大層叱りました。清
少納言の事なんぞを引合に出しまして、官女はど名譽な者は無と云ま
すから、清少納言の名譽は枕草紙を書いたから、雪見の簾を上げたのは
下女の役だと申しますと大返怒りました。ホ、ホ、ホ。さう致します中
蔭井も度々まいりまして無闇に勧めます。御存じかは知りませんが
あの人は一目見ても心の置ける人で狡猾らしい輕薄らしい相ですが
それにうるさい程勧めますのは何か譯がある事と思つて居りますと
あんの定、あるのでございます。さうとは申しませんが、口先甘く申し
ます、其裏は私を御所へ入れて、そして自分の勢力をこしらへやうと言
ふのです。たゞでさへいやなのに誰があんな人の私利の器械になる
ものですか。さう分つてから何でもかでも拒む事と決心しました。ろ

れに母は何でもかでも入れやうとするのでございます。たつて否なら嫁に行くかと申しますから先ほど聞きますと驚きました蔭井だと申します、尙否な事と断はりますとそんな我儘を言ていつまでもこうやつて居られるかと申しますからそれはもう私も遠から人の厄介になつて居りますのがいやでございますし、母も氣の毒でございますから、どうかして獨立しやうと考へて居りますが、もうかうなつては何なりと假令手仕事してもいゝから別にしろと申しますと母の氣はまた私共とは違ひまして、そんな事をしては耻だと申します。私はまた人の厄介になつたり人に使はれるのが何より耻だと思ひますが、どうしても許しません、どちらか是非承知をしろと遺言や何やかを引て皆して迫ります。どちらを向ても奴隸、男の奴隸を免れやうとすれば禮の奴隸。まうつらいやら、悲しいやら、どうしやうかと思て居ります

と今日計らまあなたにお目にかゝりまして私はいゝ考が起つたのですよ」少し顔を赤めて光のある目で秋津の顔を見つめて

「あなた私と一所に駈落ひきおちをして下さいませんか」

秋津はあきれた、今度は此方から氣違ではないかと霜夜の顔を見つめた。

遠慮は遠になくなつて今は聲も靜に霜夜は言葉を續けた「人は定めし驚きまして氣でも違つたのかと思ひましたやうが、それが望で、それでどちら破談になつて此後誰もかまわなくなりましたら、それから私がいゝやうに致しませうと思ひまして」

「で、いゝも」

「あなたも氣違と言はれてお出でなさるのであありませんか」

いよゝゝ秋津は驚いた。暫く返答に迷ふたが、何にしても此危急は助

けねばならぬとは談半から決した。が今の手段は餘り非常、自分も七年前ならやり兼ねないが今は中々。何か外にい、思案がと考へたが、獨立して立派に生活が出来たの財産をこしらへたらよかろう。それには自分の財産を分けて、否皆でもい、それをやつてが受けるだろう。か先から聞て居ると餘程見識のある女だ。意地のある女だ。理由なしに受けまいといつて理由は言へど、これは困つたが馴染もない己に一所に墮落せうなど、云ふやうな女だから案外受けるかも知れぬ、イヤ矢張己を氣ちがひと思て居るのだらう、さうなら尙い、氣違になつて言つたら不思議にも思ふまい、イヤイヤ氣ちがひにあの通り打明話をするはずがない、驚いた女だなあ。よし何とも言はせに外にい、思案があると言はふ」かう思つて霜夜に向ひ「あなたのお考も妙ですが私に少し考がおりますから一日二日待て下さい、やうに致し

ます」

「どういふお考かは知りませんが一通りの事では行きませんから思切つた事をやりませんでは」

「よろしい、私が是非——急度お救ひ申します。お救ひ申さなければならぬ譯がござ——なにきつと

此時人の來る音がした。二人は流石にハット思つた。今始めて氣が付たがいつの間にか日は暮れて薄くらがりの中に若い男女二人さしむかひ、何事がなくとも怪しく思はれるまして今秘密の相談見つけられては大不都合と秋津はあわて、霜夜を押し入へ隠した。隠してから氣が付た椽側に霜夜の下駄が脱で在るが取入れるにはまう間がない。足音は近いた。それ切戸の明く音
音は其處で止まつた。その儘暫くは何も聞へないのはさては立止つ

て様子を伺ふのかと息もせせに聞て居ると稍暫くたつてから拔足で向へ行く音がする。障子の穴からのぞくと誰だか分らぬが母屋へはいり後姿が見へた。此間にと押入を明けて霜夜を出すと娘も無言で急いで行かけたが氣が付たかわざと散歩して居るやうに歩いて行た。ホット息をついて障子をしめ坐ろうとして氣が付た押入へかの短刀が入て在る押入へかの娘を入れた。一時に露現したと思つて暫くは立ても居ても居られなかつたが漸々落付て洋燈を点し押入の口へ置て中を見るといつも隅へ置て在るのが少し居處が變つて居る、あわて、取上げて見ると包紙は元のまゝ、封は解けて居なかつた。先づ安心したが持て見はしまいか、持ては直ぐ知れる、そして虫が知らずといふ事があるから若し氣が付きはしまいか」こんな事をくりか

へして氣にして居たがガラリと障子の明たのに驚てふりかへつて見ると老僕だ。坐敷を看まはして又椽側を見て

「まだ御膳は召し上らないのですね」

いつの間にやら膳は椽側に置て在る、して見ると先に一度來て晝のと變へたに違ひない、密談の中にか霜夜が歸てからか。又一つ氣になる事が出來た

老僕は膳を内へ入れて歸ろうとするのを呼留めて待たして置き、久し振で硯箱の蓋を明けて筆を執て書たのは貝邊へ當てた手紙、後見解除財産一時に渡せとの文言

主人に渡してくれと僕をやつて坐つたが少し氣が濟だやうな。いつもは此薄くらがりが一番いやな時刻で、彼の顔がきまつて見へるが、今日彼は彼事を思出しても左程こわくない。「己の財産をやつて今の危急

を救ふて元の通りの生活をさせたら、それでよからう、元より私怨で殺したのではない、主義の爲だ、自由の爲だから此手が殺したのではない、自由が殺したのだ、さうだ、自由が殺したのだ。が関係のない妻子を苦しめましたのは己だから、だからそれを償なへばよからう、そしたら氣も休まるだろう、此事はさう忘れてしまへるだろう、さうだ、いつになく此晩は飯がよく食へた

かうなつて見ると早く貝邊の返事が聞きたいが、彼奴言ふまゝに渡すだろうか

これが又面倒だ、「たしかに使込で居る固より慾張握たものは中々離さない。富が彼奴只一の目的で義理や人情は何とも思はぬ。長の年月我物同然にした十萬圓一朝快よく渡すはずがない、急に責めれば己を毒殺——さうだ、既に怪しい此頃の仕打やるに違ひない、やるなら

やれ、死でもいゝが霜夜を救つてからでない、と死なれぬ。救ふには財産が入る。さうしたら取れるだろう」

處へがらがら下駄の音をさしてやつて来るものがある。誰かと思つて居ると荒々しく障子を明けるのは田野又造。七年前同じ主義で共に盡力した事もある男が、學問もなく識見もなく疎暴な人間であつたが、それからどうしたか、さつぱり便りを聞かなかつたのに、今時分何の爲に來たか。見ると柔かい島の綿入羽織に二子の着物角帯、以前の書生風は何處へやら行つてさう見ても商人だ、人相もよくうつゝ、居る

「お久し振です」

言葉までおどなくなつた。此方から何とも言はぬのに坐つて、烟草入を抜いて火鉢を探したが向の方にあつてシカモ火がないから手持不沙汰にそれを玩弄物にしながら「どうです、其後は」

「君こそどうした今何處に居る」

「あの何さずそここに——下宿して居るが」

「何處か新聞社へでも這入つて居るのか」

「なわにもう遠に政事社會は出たよつまらないからね政社よりは商社だ僕は今——イヤ君こそ今何をして居る」

「何——」こんな奴に對しても耻ぢなければならぬのは何と答へる事が出来ない。眞理研究は久しく怠つた否絶望した。此一年は何一つ爲す事なく妄想に日を送つて活て居る理由は少しもない

「何もしないよ」

「これから何かするののか」

「イ、ヤ」

「本當に」

「フム」

「何かやるのだらう何か、家でも持つとか旅行するとか愉快に遊ぶとか花柳郷を蹂躪するとかハ、ハ、ハ、」

「違ふよ」

「前年の意氣今安くにかあるだ子。自由よ自由よ我汝の爲に死せんなんどばまう止めかね、活人劍殺人刀、そうく、國重奸物彼斬るべしと言つたが、果して斬られたね」言てザロく、秋津の顔を見た。此男に曾て國重を斬らんかと戯の様に言た事があるもし勘付て居るのではあるまいかと思ふとウツかり物は言はれない

「國重がやられると直ぐ君は政事社會を出た子なせだ、山へ這入つて居たつてねへ。東京へ歸てから誰にも逢はなかつたかいなせこんな處にすつこんで居るのだ」

何を言ても返事をしないから退屈して立上つた

「また来るさやうなら」

そこら見まはして歸つた歸つてから「ままつた彼奴の處を聞いて置けばよかつた今の身分を詳しく言はなかつたが何でも會社員かなんぞらしい。がなせ尋ねて來たのか用があるでもなし久し振で逢ふと思て來たとも見へせ。彼奴彼事を察したか知らぬ」これが又氣になつたがそれよりは今の返事が遅い

一時も早く片付たい

待兼ねて自身に出かけたが既に戸がしまつて在ていくら叩ても開けなかつた返事もしなかつた

怒て歸て來たが此晩は中々寐られなかつた。また赤兒の事を思出して此事やら彼事やら混合して腦髓は大騒に騒だが明方になつてつい

少しの間まどろむだ。夢は見たやら見なかつたやら起てから覺へせ寧ろ寐入たのを不覺の至りと顔も洗はせ母屋へ行たが主人は朝早く出掛たといふ。失望して歸りがけフト見ると二階の窓から霜夜がのぞいて居た

目で會釋したばかりだが昨日の事を促がす様子暫く其面影が目を離れなかつた

第五章 知己

實に不思議な女だ。爲る事言ふ事皆人の意表に出る。一處に墮落せうなんて面白い。己より餘程大膽だ。あの時一所にかけ落すればどうだろ。餘程面白かろうな。人は何といふ戀——

嬉しいやうな心持だ「馬鹿なが戀と思はれると大分面白いな。イヤ

己を氣違とて居るといふ事だ。氣違と戀。成程だからあの女も氣違といふ。氣違と氣違の戀。尤も面白い俗物には癡狂院の茶番に見へるだろうが己から見ると俗物は氣違だ。俗界は癡狂院だ。氣違に氣違と思はれるのは少しもかまはぬ。只一人さう思はぬのはあの女あれは己の知己だ、只一の——

其顔を思出さうと勉めたがハッキリ見へない遠くへ小さく見へる。近くへよせて昨日の様に此處此前へと思つたが自由にならない。今死ぬと言はれても中々死ぬ氣はない。なせと問ふと答へられないが何だかまだ活て居たいあの女に危急はなくなつても返へす事はなくつてもまだ活て居たい。そして始終逢ひたい。「いつそ昨日一所に墮落すればよかつた。そして戀と言はれたらばよかつた。無論何も戀でない。戀といふようなものは知らぬが無益な學問やいやな妄想に苦

しむよりは妙だ變つていゝ、そして——陰井深、彼奴が關係するとは意外だ殊に縁談を申し込むとは、あんな奴、それは嫌ふはづだ、これは助けねばならぬ、是非助けねばならぬ、彼奴憎むべしだ」急に憎くなつて死でしまへばいゝと思つた

琴の音が聞へる。これは今始めてでない、シカシいつもは碌に耳も借さなかつたが今日は立上つて障子を明けて聲のする方を見た

「たしかに霜夜の部屋だ。して見ると此間から時々聞へるのはあの女がならすのだな」耳を傾けて聞たが逢ひ度てたまらなくなつた。琴の音は止まつた。またひくかど待て居るといつまでもひかぬ。顔でも出すかと窓が見へる處まで行て見たがいつまでも見へない。是非逢ひたくなつた。今直ぐ逢ひたくなつた

「逢てどうする、まだ貝邊の返事は來屯、昨日の事を言出されたら答へ

る事が出来ない馬鹿なもしや己はあの女に——決して決して決して敵同士だ。萬々一添ふ事が出来ても斷へて親父の事を思出して今より尙苦しく責められるだろうまして何にも知らぬあの女を欺く事は出来ないそれと知たら向がどうして、つまらない馬鹿な事を思つたものだそれより早く貝邊に逢て今の事を」

又出かけて行た又留守だ又失望して歸たがデットして居ると霜夜の事を思出すからフト思立つて外へ出た。晝外を歩くのは久し振だ。此間から露現の恐が甚しくなつて居るが今日はさほどにないのは自分不思議であつた人にすれちがふ毎に珍らしく思はれていつになく參人まで顔を見た。學校歸りと見へて束髪の女生徒が本をかへて来るまた霜夜の事を思出した。野へ出て天然の美を見たら忘られるだらうと幸人力車夫が來たから黙つて乗つた。どちらまでと問は

れて

「道灌山まで」別に深く考へてに言つた

第六章 哭 聲

二月半の事とて野は全く空々漠々。只稻村が寒さうに二三づ、かたまつて居るばかり。遠近の田舎家も寂として人が居ぬ様。木は葉をもがれて骨ばかりになつて居るがまだ足らぬか北風は用捨なく削つて行く。小川は涸れて砂の上に田舟が一つ捨てられて在るが其中にたまつた水は氷つて白い。汀の蘆の隙間には小さな蟹が仰けに死で居るのがよく見へる。空は朝から曇つて灰色の雲が一面蔽ふて居る其間から所々青空がのぞいて居るが雲に勝たれて天地は總べて薄くらい。時に日の光が横にさした。地は赤く天は黒く相映じて凄いや

うな。珍らしく鳥が飛上つた。が啼きもせせ餘り高くは上らせ勢が盡きた様にヒラヒラと落ちて野中に一本立て居る木の枝に止つた。此時向ふに立昇る烟。人を暖める焚火かと思へばさはなくて屍を焼く茶毘であつた。

寂寞を喜ぶ詩人ならば知らせ寂寞を逃れて來た青井秋津。心を慰める所でなく却て一層の寂寞を覺へて蕭然と立て居ると不意に後でワツト泣く聲。

驚いてふりかへつた。聲はきたない小家から出たらしい。我知らせ立寄て見ると前二間横一間半ほどの藁屋で壁は粗壁しかも古るび損じ壞けて所々ひきかいたやうに筋が付て居る。窓といつては一つもなく門口から明がさすばかりで中は薄ぐらひが一尺ほどの餘地があるばかり直ぐ上口だから奥の底まで見通せる。疊はなく古莞を布て

あるが道具などは何一つありさうもない一方の隅にきたない下敷とぼろ／＼の毛布が敷てあるばかり。家内三人。今泣たのは十二三の女の見でまた大きな聲は出さぬがシク／＼隅で泣て居る。傍に主人と見へて六十ばかりの老翁これもしはれて俯いて居る、妻と見へるのは五十位イヤよく見ると夫婦とももつと若いに違ひないが非常にやつれて非常にふけて見へる。殊に妻は病氣と見へて顔色は黄色くなつて目は落込み時々ひどく身を顛はし髪もバラバラにして細帯は解けか、つて居る着て居るもの、きたないのはいつもかうらしい。主人につめよつて度々目を拭きながら何か言て居る

「處は何處ですよ捨てた處は」

主人は答へない

「何處ですといふのにねへ。まわあきれつちまうよ人に何とも言は

お前に勝手にろんな事をするツて、何ともないので、ひどい人だ。お前さんは何ともないか知らないが私はいやだよ、かわいさうだよ、いかに苦しいツて、すて、すて——子にやつたもよく出来た、ひどい處へかやんなすツたんだ子。たどひ翌が日かつへて死でも親子四人一所に死だら私は本望だ——これがこれが持船の十艘もあつて五間間口の家に住だ身の果ですか」

「昔の事を言たつて仕様があるもんか、何も己が悪るいからかうなつたんじやないや。競争で相手の海産會社は上の金を借りてやるからかなわぬ。負まいと思ふ程借が出来て、ままいには此ぎまだ。頼りにする倅は徴兵に取られて訓練の馬から落て死でしまひ、一人の妹はあの通りだ。あん畜生、さんく、心配をかけやがツた舉句には勝手に家を飛出し、其後聞けば藝者になツて、ままいには青井とかいふ金持の

妾になツたといふ事、うれに子が出来て、旦那の死ぬ時内々で大分金を貰つたといふ事だが、そうだらう、いつか上野で逢た時は立派な風をして、伴の二三人も連れて居やあがツたが見ぬ振をして行きやがツた、聞けや其子といふのも大層出世をして居るさうだが、あんな奴が榮へて己等は此ぎま。憎いや。まどもにやつてかうなるんだから、これからは間違つた事をするより外に仕様がねへ。子を捨てる位な、でもないや」言て一寸目をこすつた

「だツてお前さん、かわいくないのかい」

「かわい、も何も言て居られるかへ」言たが俯いて額を抑へて暫く黙つた。「お前は乳は出せ、其病だ」

「貰乳をしますよ」

「誰がおいらの子に乳を呉れるもんかへ——おみのほ一日内に居

せあいつがあつちや己はどうする事も出来ねへ」

「出来ない事はありませんよ」

「馬鹿言へ」

「何處へ捨てたんですよ、何處へ私はこれから取りに行きます」

「馬鹿、何の今まであるものか、もう一日と半日立つてらあ」

「かまいません、其邊で聞いたら分ります、何處です處は」

「言たッてだめだよ」

「イ、エ言て下さい」

「困るなあじや言てやるが言ふだけだよ——市が谷の堀端だ」物をも言はせ母親は飛出した、其途端門に立て居る秋津に突當てこけかゝつたのを主人が追かけて出てつかまへた。無理に引ばつて内へ入れたが秋津も一所についてはいつた

「そのお子は私が」とまで言つたが今自分の部屋にない事に氣が付いて跡が出ない

「エあなた御存じでございますか」すかさず母親は問ふた

拾つたと言はふか言たら直ぐつれて來なければならぬ紛失したとはどうして言はれやう、秋津は急に答へられなかつた

「なんの御存じなものか、今頃は犬でも喰てしまつたらう、ハ、ハ、」主人の一言に思出したのは灰色の毛に紅の付た瘦犬。「本當に喰てしまつたかも知れない、誰が何處へやつたらう、外にだうするものはない、貝邊だ、彼奴の指圖だ。大方井へでも棄たらう、ろして犬でも喰たらう」いよゝゝ答へられないが兎に角詮議して若しさうなら辨償さす、己にも責がある、己もする、今は只何とか言てと取り敢へせ「何だ私が探して上げますつれて來て上げます」

「なわによろしうございますよ」主人が言ふ。「捨てた事が知れたら却て困ります」

「イヤ是非つれて來ます、心當がありませんから」

「まわ御親切に、あなたどうか願ひます。私は此通り悪うございますから何時死ぬかも知れませぬが死ぬまでも抱きとうございます」呼吸せわしく顫ひながら言たが忽ち何か吐た

「よろしい明日急度つれて來ませう」言て出がけにフト見ると主人の頸に壞疽があつた

第七章 汚い紙

家へ歸て坐ると直ぐ老僕が手紙と紙包を持って來た。取て見ると貝邊の返事、財産の計算が急に出來ないから、其内詳しく報告する、不取敢現

金三百圓當分の小使にと別に紙に包である

「果して果して彼奴使込んだ。それでなければあゝ急に大きくなるはずがない、がそれにしても損をしたのか、イヤイヤ方々の會社に關係して殊に海産會社、彼奴だな、先きの老人と競争して倒したのは、倒して獨占事業になつたら損のいくばうがない、いよく仕上げたに違ひないが、それになせ己の財産を返へさぬ、矢張慾だ、何處までも自分の物にするつもりだ、己を氣違にして治産を禁じて自分が、が本當に氣違と思つて居るのか知らぬ、さうならなせ此金を渡すだらう、皆に氣違と思はして自分もわざとさう思つて居るやうな顔をして居るのだらう、さうだ彼奴の事ならさうだ、憎い奴だ」むら／＼と腹が立て來た。手紙と紙幣を攫ひて飛出し荒々しく障子を明けて母屋へ通ると貝邊は奥から來る出合がしら、いきなり手紙を叩きつけた

「さ、あ渡せ、あ渡しなさい、今直ぐ直ぐ此處で——私は氣違でない未丁年者でない、馬鹿でない、なせ正當に渡さぬかなせ、今まで報告を怠つたかなせ、冷、冷、冷——氣違あつかいにしたか——僕は氣違でないぞ、どいつもこいつも面白くない奴ばかりだから逢はないのだ、出ないのだ。ろれに禁錮同様なせ、虐待したなせ、あの赤兒を盗むだ、何處へやつた、さあ言へ」

あきれて茫然立たま、貝邊は物が言はれなかつた、秋津はますます激昂して

「なせ言はぬ、さあ早くお出しなさい、赤兒を財産を、出さないか、出さないつもりか、さうだろう、取るつもりだろう、己を殺して、も取るつもりだろう、そんなに金がほしいか、こんな汚ない紙がほしいか」
片手に持て居た彼三百圓の紙幣を手早くツタツタに引裂て、貝邊の顔

へ投付けた

驚極つて貝邊は身動もせせ立たま、

それを睨でかやく目に唇少し顫ふて、まっ青になつて秋津は立つ

處へかけて來た女、彼霜夜、何處ぞの歸りか、藤色の小袖に白茶の帶、髪も

綺麗に束ねて新しい簪の花一輪

貝邊には目もかけせ、いきなり秋津の手を取て無言で引張て離坐敷へつれて行た

秋津は抵抗もせせ茫然引かれるま、に付て歸たが上へ上ると霜夜は障子をしめて坐つた、秋津も力盡たやうに坐つた

暫くは互に無言

「矢張駈落がい、でせう」

少し笑を含むで霜夜は言つた。今の事は丸で忘れた様に

意外の言葉に秋津はあきれて顔を見つめた
又無言

霜夜はツト立て押入を明けやうとするからあわて、止めて秋津

「ど、ど、どうなさるのです」

「ぐづぐづしては居られませんよ、早く大事の物をまとめてお持ちな
さい」

「なせなせ」

「あなたまでくくして居るとつまらない目に逢ひますよ、早く一所に
遠い所へまだ分りませんか、今の様な事をなすつちや此儘では濟ませ
ん、今頃は警察へ人が行てますよ、今晚からお住居は癪狂院」

「でも外へは行かれませぬ財産を受取らなくつちや」

「何の渡しますものか、また入らないじやありませんか、親の財産なん

ぞ當にしなくつてもいい、じやありませんか」

「入ります是非入ります」

「何に入ります」

「何つて入ります、危急を救ふのに入ります」

「誰の危急を」

「エあの何です——あなたのです」

「私に金は入りませぬ、何萬圓あつたつて役に立ちませぬ」

「立ちます、キツト立ちます私の財産は十萬圓ですが、それを皆上げま
すから獨立して元の様な生活をなさい」

「なせ下さるのです、なせ私に皆」

「上げねばなりません私に——是非上げねばなりません。上げね
ばならぬ譯があります——譯がなくつても上げます。何でも上げ

ます、金でも命でも」

霜夜は穴の明く程秋津の顔を見つめた
處へバタバタかけて来たのは霜夜の母親、いきなり娘の手を取て引張て連れて行た

秋津は茫然止めもせむ立もせむ暫く迹を見送つたま、
夢の様だ、何を言たか爲たか聞たか一寸急にはまどまらない、やつとの事で一筋引出したのは駈落又駈落、「不思議、不思議、實に不思議だ非凡な女だ、中へ這入つて己を引張て来た時まう決して居たのか知らぬ、そして何處へ行くつもりだろう、行てどうするつもりだろう、いつまでも一所に居るのか別になるのか、「離れどむなくなつた、始終、毎日一生一所に居たくなつた。「エイ憶病、又グッ、して居たからつれて行かれた。なせすぐ出かけなかつたか、何に未練がこんないやな處、こ

んないやな部屋、どれを見てもいやなものばかり、穴の様だ、墓の様だ、牢の様だ、癡狂院の——お住居は癡狂院——イヤぢツとしては居られない癡狂院へ入れるといふから。失敬な怪しからぬ、憎むべき奴だ、來やあがつたら、どいつもこいつもなぐりたはしてやろう、イヤそんな事をしたらいよ、氣違とする、まづい、くやしいな、が誰がおめおめ引かれて行くものか、シカシ此處に居つては多勢に無勢だ、出やう早く出やう、が霜夜、ままつたなわ先き一所に出れば、エイ因循、我は馬鹿だなわ、まう來ないか知らぬ、呼に行くわけにも行かぬ、待ては居られぬ」

忽ち足音

「ソラ來た誰だ」思はぬ立上つて障子を覗むだ
誰も來ない

「たしかに音がしたなせ来ないだろう来るからには一人ではあるまい三人も四人も来るに違ひない。若し霜夜が霜夜ならなせはいらぬ、明けて見やうかイヤ別の入だ敵に違ひない、ハア様子を伺て居るのだな、来い居るぞイヤ出ちやまづい隠れやうか隠れても無駄だな」分別に迷ふて居ると外はいつまでも寂として何の音もない、日はいつかくれて追々暗くなるが身動もせせ洋燈も点けせ、玄まいには真くらがり

いつまでも晚餐を持って来い、「いよく」それに違ひないがもう出るには遅い出られまい、イヤそんな事を言て居るからいけないのだ、今からでも出やうが出るには霜夜逢へないか知らぬ、

跣足でソット走て来る音がする障子の外で止まつた。「オヤ」と小聲で言てソット開け

「秋津さん」

「霜夜さんですか」思はせ高聲で言つた

「どうなすつたのなせ洋燈をおつけなさらないの」

「でも何です居る事が知れますもの」

「いつまでも居ると思はさなければいけないじゃありませんか」

「成程さうでしたね」手早く洋燈をさがしてつけた

霜夜は内へ這入つて跡をしめ秋津の前へ坐つた、今度は秋津から

「さあまいりませう」

「さう急がなくつてもよろしうございますよ」

「イヤ来ます、グツ／＼して居ると来ます」

「来ますまい、貝邊は出て行きましたか、まだ歸りませせ、癡狂院行は明日になりませう、そして今出かけては見付られますもつと夜が深け

ないといけません」

「さうですか、そしてあの――」

「今夜十二時頃またまいりますからその時一所に」

「エイそして何處へ」

「何處ツて私もまださまならないのですよ、長くなくていいのです一月か二月その間さへ知れなかつたら跡は却て見付られる方がいいのです」

「それまで御――一所に居るのですか」

「勿論です、あなたおいや」

「イ、エ」と思はせ言て顔を赤めたが嬉しい心持

「先きあなた妙な事をおツしやツた子、金でも命でも何だツて。本當ですか」

いよ／＼赤くなつたがいよ／＼うれしいが返事は出来ぬ言たいが言へぬ。ソウロと目を舉げて見ると向でも見て居るあ、暫くは互に見つめて居た。忽然二人の目と目の間へ血に染た國重の顔がヌツト出た
キヤット一聲秋津は飛で逃げ出した

第八章 血に染だ顔

裏口から飛出して無二無三にかけ出したが後から呼ぶやうに思つてその毎に冷々する、方角も見せ町にかまはせ何かなしに逃げたがつまつく毎につかまへられるやうに思つてツツトした。まだ夜は深くないから人通があるが幾度か突當て其毎には其人がつかまへるやうな。吾知ら老靖國神社の内へ飛込だが左側から裏へまはつて抜けや

うとするど裏門がしまつて居る、此方側へまはるとパツト目を射る電氣燈に、タチタチト跡よつた。引かへすのは何だか恐ろしく進むには前に居る様、木立の間へ逃込だが何處にもヂツトして居られぬ。あちらへ走りこちらへ走るはづみに池へ落ちた。

「もうだめだ、仕方がない、どうなりとしろ」かう思ひながら岸に取ついたまゝ、で上りもせき目をふさいで暫く居たが寒を覺へて上つたぼんやり立上つたが少し氣が静まつた

「本當に己は氣ちがひか知らぬ」

自分で自分がいやになつた。誰ぞ来て殺してくれ、ばい、と思つた。がまた霜夜の事を思出して「も一度逢ひたい逢ふまで死にたくない、跡でどうしたろう、氣ちがひと思つたか知らぬ、無理もない、自分にもろう思はれるもの。があの女にまでそう思はれて。イヤそれもかま

わぬが己の此心を、此思を眞實でなく狂氣と思はれては——假令本當に狂氣でも此思だけは正氣だ眞實だ。これだけ分ればそれでよい、跡は氣違でいゝ、が只それだけ分つて、かわいさうだと思つてくれ、は十分だ。己は満足して死ぬ、が思ふまい。思ふはづがない」悲しくなつてこらへられない。涙を流した

まは——と家の方へ歩るき出したが、三足四足歩るいては立止り立止つては行く。外へ外へと思ふがどうして外へ行かれよう「死ぬにも殺されるにも今一度霜夜の顔が」

どうく、切戸の外まで来た「がはいらうか、はいるまいか、今までよもや私の部屋に居るまい、歸たか、續て出たか」戸に耳を當て、聞たが何の音もない「いつそソツトはいつて見やう」と戸を明けて、見ると洋燈は其儘障子に人の影はない

拔足でソット障子の穴からのどくと油が盡きてか洋燈の火が消へか、ッて四方は暗い、玄かし人は居ぬ様子

さては歸つたのか出たのかと立止つて考へたが、よく改めて見やうと障子をあける其途端目先へ短刀かの時用ひた血付の短刀
ヅットして立すくむだ。持て居るのは貝邊得藏

残らぬ抜て裏表改めて又鞘へ納めて「これは何です」

返答は出なかつた

「あなたのですか」

「そ、ろ、うです」

「い、刀です子、血の痕がありますがよく斬れましたか」

「古です、古を買ったのです」

「いつお買ひなすつた」

「あの七——何遠に買ひました、忘れました何時だか」

「何處でお買ひなすつた」

「忘れました」

「何の爲にお買なすつた」

「なせなせ、さう厳しく問ふのです、買たがどうしました、私は誰も誰も殺しはしません」

「殺したら大變だ、人を殺したら大罪人だ」

「罪人じゃありません、殺していい、奴を殺しても罪人じゃありません」

「殺していい、奴がありますか」

「あります」

「何處に」

「何處につて其——私は殺しませんよ」

「これ一寸お借しなさい」

「いけません、何になさる」

「なに一寸かります」

「いやです私離しません、入ります」

「何に入ります」

「人がいやといふ物を何しますか」目を怒らしていふ其顔をギョット見て

「隠さお言ちやどうですな」

「何を」

「誰を殺したのです」小聲で静に言つた

水を背中の筋へつがれた心地、言葉が出ない

「決して他言はしません、私はあなたの御親父に恩があります、御死

去の節にもあなたの事をくれぐれもお頼みなすつて後見にまでなすつた位だから何でああなたの不利益な事をしませう、及ばおながら今まで、も手の届く丈お世話をして早く御成人をと思て居る中、あなたは政事に御熱心で家の事は御頓着がない。まあ、その内にと利益の多い事業を撰むで財産をふやしてから此通りでござりますとお渡し申さうと思つて居る中國重さんが殺された時分から山へお這入りなすつて、それから暫く音信不通。やう、またお出になると今度はお人にも逢はせ物も言はせ、私は本當にどうかかなすつたのかと思ひました、だからいよ、財産は大事にして、わざと其話もせせ、守て居りました、があなたはお誤解してお出でなさる様だ、が私も今ではお蔭で少し身代も出来、何も不足はありませんから、實に疑はれては迷惑です、そんな事は御安心なすつて、それより此です、此仕末はどうなつて居ります、

餘程前の事と思はれますが、よく現はれ宅に居りました、玄かしこれをこんな處へお置きなさつちや誰の目にかゝるか知れませんが。これは私が預かりませう。そして外に何もありませんか。またお心添へ申す事があるかも知れませんが、それに伺つて置かぬと万一外から現はれでもした時にやりくりが出来ません。私はあなたの爲にいふばかりでなくお親父の爲、お家の爲に言ふのです。もし現はれでもしたらお家の瑕に「なります大變な疵で取りかへし様がありません。エどうです誰を」

「私は知りませんそんな事ありません」

「ギヤ此刀はどうしたのですなせおかしなさらぬのです怪しいじやありませんか私はお爲を思つて言ふのですよ、決して悪意で言ふのじやありません」

「知りません」

「どうあつても」

無言

「それでは仕方がありませんこれ程申してもおツしやらずば是非がございませんな此刀もそれではもつと外へ容易に知れない處へお隠しなさい、あ、嘆息します。玄かし十分注意して露現を防ぎますからあなたもよく御注意なすつて」

斷は秋津の顔を見て言たが俯いて物を言はないから其儘立て歸て行た

秋津は跡を見送りもせ宅俯いたま、考がへ出した

第九章 曾我物語

秋津が不意に飛出した時は霜夜もあきれた。譯が分らなかつた。其顔と言たら何とも言へぬおそろしさうな顔であつたが何がこわいかわらぬ。兎に角ついでに出てやうと障子の外まで行く途端來かゝる貝邊に顔を見られて流石に頓に口實も出せ今更逃げられもせせだまつて自分の部屋へもどつた

部屋は二階で六疊敷、床の間の上には亡父の寫眞をかけて遠棚には昔の名残親の遺物。蒔繪の箱に古鏡一面母が愛讀する曾我物語母はと見ると床の間の前に坐つて自分の這入つて來たのも見もせせ俯むいて考へて居る。「毎日見て居るがさてもおやつれなすつた事。お年はまだ四十六、ろれにまう白髪が澤山見へて殊に額の上の三筋四筋はギラギラする、始めから瘦形であつたが今は頬骨が現はれて眉の間に劔が見へる。鼻は尖つて目は窪み膝の上に載た手の細さ。あ、

皆御苦勞なさるからだ濟まない子。私に何か専門の學問か藝があつたら少しはお樂にするもの氣はあつても今の身分では出來せ獨りやるにも子供の時から舊弊な事ばかり教へられて禮義や作法をやかましく言はれ學問と言つたら女大學。内々で小説を讀だら現はれて叱られたがどうしても止められせ皆に借りて讀だ讀だ恐らく私の學問と言たら小説だろう。だからこんな氣ちがひ染た事がすきになつたんだよ、當り前の事が面白くなく變つた事がして見たくだからこんな身になつたのも左程苦にはしないが唯人の侮り。氣兼氣苦勞私より母様の御苦勞が何よりつらい、せめては御氣嫌に逆らわせお慰め申さうと思ふが今度の事ばかりは、どうも従がわれぬ、あれもこれも、どちらも否だ。ろうく、いつか決心した事がある私の氣に入つた男がなければ一生結婚しないと、これも小説か知らぬ。でも今の世の中を

んな人でも夫に持てば負けねばならぬ、それにいやな人に誰が負けるものか、それよりは餘程獨りで暮した方がまし。が御両親はさうでない、女は是非妻になるもの、子供の時は親に従がひ嫁しては夫に従がひ、いやな規則だ子、それになせ女官なんていくら御遺言でも。そして蔭井が始めまきりに勧めて置いて私が不承知だといふと縁談を申込だのはなせだらう。母様はどツちかと言ふと矢張蔭井の嫁になる方がい、のだよ第一一所に引取るといふから。があんな奴を誰が人いやいや、いや一番いやなのは誠がない、情がない、口と心が違ふが大抵の人はさうだ子、でもあの人は殊にひどい。あんな人は外に媚て内で壓制するたちだ、だから母様もだまされて譽てばかりおいでなさる。困るね、丸で氣が違ふから、母様なんぞは何よりかより甲斐性のあるのが出世の見込のあるのがかんじんだとおツしやる、私はさうじやない。

假令甲斐性はなくつても、意苦地はなくつても、誠、只誠があつたらそれでい、。ほんとうに私を愛してくれ、ば私は養てでも行く、此身はどんな苦勞をしても厭はない」

「霜夜」

不意に呼ばれて吃驚して見ると母親はいつより厳しい顔付

「一寸こゝへおいで」

何事かと傍へ行くと

「今歳は父様の七回忌だ、それに敵が知れたのは矢張父様の――」

「エ知れました、それは誰」

「私はあの時から悔やしくつてくやしくつて何でもかでも敵が出なければ死で言譯がないと思て居ました。それにお前が男であつたら草を分けても詮義さすのだが女だから仕方がなくせめては早く夫を

持せて力になつてもらひたかつたがよろしく、今度願てもない處から申込になつて、こんなうれしい事はない」

「どうして知れましたのです」

「あの方は高等官で交際も廣いといふ事だから何かの都合もよく、殊に大臣にでもおなりなされば——」

「誰でございますよ其人は」

「何を言ひだよ、分て居るじやないか、蔭井さんさ」

「い、お敵は」

「お前も知て居るだろうあの青井秋津さ」

霹靂に腦を打たれた心地。母は別に聲も張らぬ

「先程此處の御主人が見へてお話しであつた。あの時からどうも素振が怪しいと思つて居たが證據がなく自分も後見の事だから荒立ぬ

に内々心配して居ると此頃店へ雇つた男が元あの秋津と一所の仲間
でよく言つたさうだ、國重を——國重を生かして置いてはいけないから
斬うつて。だがほんどうによもやるまいと思て居るとあの時分から
姿を隠したのが第一怪しい、それから二度東京へ歸つてからも人に逢
はぬ、あの奥に隠れて病人の様にやつれて居るのは何でも我と我身を
責めるに違ひない、昨日とか其男に様子を見にやると言葉の端々が怪
しい、うして主人に財産を皆渡せと云出したさうだが大方外國へでも
逃るのだらう私は——主人がおツしやるのだよ——あの男の後見人
だが國重様には一方ならぬ御恩を受けてかういふ身になつたのも全
くお蔭だから外の人なら云はないが、あなただから申しませぬ、餘りお
やしさうだからどうかうおツしやツた」

霜夜の胸は波又波。親の敵が意中の人とは

八十七
こればかりは夢にも虚にも思はなかつた。なんで思はう「わの人が、あの誠のある情のある。始めて逢た時は自分は子供、殊に一度か二度だからよく覺へないが、二度東京へ歸つてお出になつたと聞てどんな人か逢たいと思つた事もあるが遂に逢へ、その内に狂氣したと皆の噂いよいよ變に思て氣にかゝつて居た。所へ此間の宴會最中突然這入て來た人、一目にうれと分つた。狂氣にしるないにしる誠ある人と見拔たば輕卒かは知らぬが誤まらぬつもり折も折とて此身の切破、ト墮落の考が起て我ながら無法の極とは思ひながら、どうしても止められ、忍で行く様子を見たがいよいよ氣ちがひらしい處もなく這入りは這入つたが流石に言出し兼て居ると向からお尋ねなすつた。ので、思切て言たが只の人ならなんの承知をしやう馬鹿など一口に消されるのだが親切に心配して、何か思案があるとの事、其日は其儘分れたが、今

日晝のあの争かわいさうにわの人も後見人に財産を横領されて其上に侮どられて氣ちがひあつかひ。あの時決した是非此人をと。猶豫して居ると癡狂院へ入れられて本當に發狂なさるだらうから互の爲にいよいよかけ落と決して引張つて行たが、あの時わ、情のある誠のある。——本當に愛してくる人は此人、愛する人は此人と決つた。其後逢た時なせ飛出——「もしやと思當てブル——とした」
「決して決してそんな事があるはずがない、これは畢竟貝邊の奸計、あの人を罪に落して財産を自分の物にしやうと思つて巧むだ事、それに違ひない、さうか私の心を悟つて二人の中を割かうとするのか、イヤこれは知れるはずがない、矢張財産を取るつもり、それに違ひない、違ひない、違ひない」
所へ這入つて來たのは貝邊得藏「先刻はお邪魔を致しました」と母

に言たのが自分に當てたのかと顔を見たが自分の方は見を母に向て「いよ／＼分りました。今調べに行て見ましたが何處へ行たか居を幸にして上つて押入を開けますと短刀がありました」霜夜はハット思つた、「成程ある自分も隠れた時氣が付いて持て見た事があるがそれがどうして」

「抜て見ますとござりますわい血の痕が。いよ／＼さう思ふ矢先へ歸て來ましたからいろ／＼たゞして見ますと仕方のないもので問ふに落ちを語るに落ちますわ、殺さない／＼と問もせぬのに言譯します。ろれに短刀を一寸借せと申しますと離しません、だん／＼尋ねましたが知らぬ／＼と言ひ通します。えかし素振といひ言葉の端々知て居るといふも同じ事でござりますから歸てまいりました。たしかに相違ございませんから一寸おこたへに」

「まわ御親切にありがたう」母は涙を浮べて「憎い奴でござります、さうと知れましたからはまう此方のものでござります、これで嚴道も——目をまばた、いて「無念が晴れますでございませう、がだうしたものでござります直ぐ警察へ届けませうか」

「ろれは私は何とも申兼ます、私は實につらいのです、御承知の通り後見ですから私の口から知れたとなりますと、さうも快よくありませんので、さうか人には外からお聞になつた様に願ひます」

「それは承知致しました、が今の處早く捕まへませぬと逃ましたらいけませんから、さうでせう」

「さうですわ、イヤ逃げた處で知れて居りますよ、いつそ逃して外でつかまへた方が——」

「そんな事をおッしやつて知れなかつたら大變です」

「なわに大丈夫です、外の者なら知らせ、あの男は直ぐ捕へられますよ」
「それでもあなた」

「が警察へは早いが宜しい、それから跡は向に任して子」

「急度死刑になるでせうねへ」

「それは何しろ國家の重臣を殺したのですから極つてます、まかしう
れまでに死でしみますよ」

「さうすれば日本晴が致しますよ、こんな嬉しい事はありません」

「私は又後程」

「まことにどうもだん／＼お蔭様で——」

「イエ私は何も何です、お禮をおツしやツちや困ります、實につらい
のですへ、」

出て行た、母は娘を見かへつて

「まあうれしいじやないか、エ七年の間無念に思つて居た敵が知れて
こんな嬉しい事はない、お前も嬉しかる、エ、、どうだ子」

娘は無言。顔の色は死人の様になつた

まだ疑念がある、まだ信じられない、十の十までそれでもまだ決められぬ、此上は自分に問て、あの口から直に聞くより外に仕様がな、また有ても信じられぬ。が萬々一ろうだつたら其時は——其決斷はこわくて出来ぬ。わざと外の事を思てまぎらして立て行かうとする、母が「どこへ行く」

「エ一寸」

「一寸て何處へ、昨夜も先もお前青井の處へ行て居たが何しに行たの」

「エあの——病氣と聞きましたから見舞に」

「見舞にて、今まで心易もしないじやないか、それに見舞とは」

霜夜は弱つた。此言譯は急に出せ、やつとの事で

「あの庭をあるいて居りますと、フト出逢ひまして久し振で話が出ま
してそれで――」

母はツクツク見て「さうかへ」と言て考て居る

「一寸」といつて又行にかゝると

「青井の所へ行きはしまい子」

「い、ね」

「親の敵だよ、昔しなら女でこそあれ一太刀恨まねばならぬ處だ」
後に聞流して二階を下り霜夜は秋津の部屋へ行た

第十章

いゝえ

行て見ると秋津は坐つて俯いて考へて居る。フト顔を舉げて見て、

ツクリして又俯いた

霜夜は極膝近く坐つたがまづ顔を見てさがし出した。「どうして此人
がそんな事」

が何と言出さう。霜夜は暫く考へて「先はどうなすつたの」

「エあの――氣がちがったのですハ、ハ、ハ。私を本當に發狂した
とお思ひなすつたでせう」

「い、ね」

一語千金。秋津は涙が催した程嬉しかった

暫くは互に無言

「あの親父が殺されたのは何故でせう」突然霜夜が

胸を刺す一言。「さては悟つたかならば何をしに来たろう。まだ知らま
か、兎に角殺したのはあなたかと言はせに、なせ殺したとは少し余地が

ある」かう思つて「それは私怨でありませんが、主義の爲です自由の爲です」

「親父は何か悪い事を致しましたか」

「悪い事——其何です國民に不利な自由主義に反対する政略を」

「それは悪意があつたのでせうか」

「分りませんが其やり方の悪いのは誰にでも分てます、幾度も論じました十分に——それにかまわえます——反対の——」

「が殺さねばならぬ罪人でしたか」

グツト詰つた、殺す以前か殺した當座なら直ぐ罪人ですと言たろうが今は大に變つて居る

「でも、でも、そうしなければ到底だめですもの」

「ヂヤ死だのでよくなりましたか」

又詰つた、これが尤も失望の事もし目算通り行たなら殺したのも左程にも思ふまいが全く反対無益であつた、

「そして殺した人は今どうして居りませう」

いよゝ、窮。「其人は死だ同然、前途の事業も一生の目的も皆これが爲に誤まつた、永久の憂鬱、永久の煩惱、永久の苦痛

「あなた其人御存じ」

たまらない、又逃げ出したくなつた。「がだめだ、どうせ言はせには居られない、欺く事はとて出来ない。が、さうと言たら恨むだらう、憎むだらう、此思は中々分るまい、分つたら尙怒るだらう、ヂヤ先へ思ふ事を言はうか、言てどうする其口でお前の親は私が殺したとどうして言へよう、いつそ暫らく言はせに、そんな卑怯な事は出来ない、困つた、苦しい、あ、」また國重の顔が見へて來た。若し知らぬと言たら、瞞殺す

ぞと言はぬばかり

思切て言はうと顔を見ると又言へなくなる

言ふまいとするど又血の顔が

俯いて小聲でふるへ聲で

「あなたの親御を殺したのは私です」

目ばたきもせせ空を見て霜夜は何も聞かぬ見ぬかの様。暫くしてプ

ルブルト身を顫はして紙の様に白くなつた顔に恐ろしい目でザツト

見て

「もうお目にかゝりません」

起上つて出かけた。秋津はあわて、袖を止めるとふり切て走て行つた。

第十一章 何て死ぬ

氣拔がしたやうで跡を見送る元氣もなく秋津は茫然坐たま、

暫くたつてやつと考へ出した「あゝ、これまで、これまで己の命も

これまでだ。今まで何の爲に活て居たろう。捕へられて辱しめられ

て、斷頭臺へ登るのを待て居たのか。ろればかりならい、が敵の娘を

思てその爲に、その爲に——イヤかまわぬ悔ひぬ、此思は通せども

思ふ女に逢たので満足せう。戀戀の爲に死ぬうれしい甘じて死ぬ

る——己が死で己の財産をやつて、ろれで恨も霽れ元の通りの生活

をしてくれたらそれで満足だ。がその財産まだ手に入らぬ、彼奴まだ

渡さぬ。どうしたら渡すだろう、何でもかでも受取らねばならぬが、ど

うしてもかうしても渡ささうもないまして彼事を知た様だから尙更

だ。ヂヤ霜夜に渡してくれといはふか、己にさへ渡さぬのだからな

んの渡さう。遺言状を書かうかイヤ皆が狂人として居るし死だらど
うでも言へるから無効だらう。くやしいな。只死では犬死だ。財産
を渡さなければ己の思は知れぬ渡しても知れないにしろ、それであの
女の危急を救ひ今までの事を償なひ恨を忘れてもらねばならない
のに、困つた困つた、どうしたら取れるだらう」

立上つてそこいら歩るいたが思案は出ない。庭へ下りて器械的に植
木鉢を取て又捨て築山の壞についてまいつて裏口の處まで來ると外
で啼く犬の聲にフト赤兒の事を思出した

「オあれもどうかしなればならない。責任ばかり重うて慰は一つ
もなし」涙がこぼれる

言譯に一遍外をさがして見やうと切戸を明けて出た。星の光五つ六
つ。咫尺の間はかすかに分かる。溝や塀の側をさがして歩るいたが

何があるうぞ、横ばかり見て歩るくので思は老人に突當つた。見る
と子供だ。よく見ると見たやうな女の兒

「オ、お前は晝道灌山の下で」

「エイ」

「どうして今頃こんな處へ來て居るの」

女の兒は泣出した

「どうしたの何を泣くの」

「おッかさんは死にました——おとツつさんは葬のお金をこしら
へようと思つて餘所の物を——盗でまばられました」

何もかも破滅々々

よし／＼今に言譯すると心で言て別れたが思出して懐を探がし紙入
を出した中を見ると少し貨幣があるから小もどりして女の兒に無言

で渡した

切戸をあけて又中へ這入つたが、しめる戸の音と共に「さうだ貝邊、彼奴殺ろう、殺して取らねばとでも取れぬ。己も死ぬのだ」
断然決した

第十二章 運命の手

部屋へはいつてかの短刀を取出した。此刀、人を殺して今我を殺す、思へば運命の手か、持もおそろしい。が此刀、これで彼奴を殺し己も死ぬばそれで役済
抜て見た

十分斬れる、今日を待て居た様な
鞆に収めて立たうとする處へ来る人がある、誰だろう

障子を細目に明けてのぞいて、改めてスツトあけてはいるのは意外の人物蔭井深。彼奴何をしに來たのか
薄くらい光にも分るのは留針の金剛石、ブロックコートのはたんをはづすと胴衣の下から金鎖。帽も手袋も母屋へ置いて來たか何にも持たせ悠々と坐つて少し笑つて「君此處に居るのだつて子、少しも知らなかつた。これはい、隠家だ、さうだ誰にも逢はなかつたか、非常に變つた子、僕も變つたらう、君は瘦せた、僕は肥へた。君は苦で居る、僕は愉快だハ、君に謝さなければならぬ、お蔭で早く新陳代謝が出来て誠に難有い、僕今では復た舊年の敝褌袍に非せさ。かうやつた處を親父に見せたい、僕がこう立派になつたのと君がさうやつた處を親父に見せたら、いかに兄弟とて——ハ、しまつた仕方がない言てしまをう。僕は君の兄だよ、腹變りの兄だよ。その代りに君

をかゝい、とも何とも思はない、僕は日蔭者だ、玄かも君が生れたか蔭にいつまでも私生子、餘計な面倒を見ましたよ、當然の権利を得なかつたよ。だから君が翌が日しばられやうとも若しくは絞刑に處せられやうとも何ともない。僕近日結婚する君とは非常の關係がある國重の娘霜夜と喜でくれ玉へ美人だせ、何よりかより君の爲に苦だものを君に代て助けるのだから謝してもよからう、禮には財産——なに僕も禮を言はなければならぬ。君は霜夜に忠告したさうだ子僕を嫌へッて。誠に難有う、十分お禮を申します、實はお禮に來たのだ。お蔭で談もまとまりましていよく結婚は明後日」

秋津は短刀を抜て斬てかゝつた

身を早く引て庭へ飛下り一目散に逃出すのを己れと秋津は追かけて行た

第十三章 無言の命令

霜夜は秋津が止める袂を拂つて部屋へもどつたが母は居屯、却て幸と床の間の前へすわつた

仰て見ると父の寫眞、髪長く髯黒く眼光鋭く口大きい、あの聲、ボキボキした聲、今でも聞こへる。どうせい、こうせい、命令ばかりおつしやつたが今度の命令は一番酷い一番つらい。が従ひます、従がぬ譯にまいりません、従はねば死ぬまでお叱り、死でも御立腹は解けますまい私も辛抱が出来ません。その代り心の底ではあの人の事を思ひます、思ふだけはおんにんして下さい、御命令の通り中を割きます、口へはまが出しません、二人の中はどうあつても切れません、これを切ります自分で切ります、その苦で御勤辨遊ばしませ。其代りには思はして下さい、下さらなくつても思ひます、思ひます、思ひます、思はせには死なれ

九十八
ません、思て死ぬは思はせに生て居るより樂です、死でも其代り御傍へはまいりません、私が死ぬばわの人も死にませう、それでお恨もお叱も霽れませう、申譯はこれまで、どうか見て居て下さいまし
人の足音がするのは母様か、母様には實に濟まぬ、此儘死ではお一人でさぞお困り、折角これからは元の様にと思てお出でなさるのにお出来ぬばかりか又一倍の御苦勞御心配。つらい、つらい、これが氣になる、仕様はないかね、まかし外に頼む人はなし、此處の主人は尙おそろし、あ、誰かい、人が、誰もない、濟まない、かんにんして下さいまし、こればかりでは死なれた譯ではありませんが、活て居ては尙濟まぬ事が出来まする」

親への言譯は濟たが濟ぬは流石思切ても切られぬ情人。未練にも一度逢はうとは言はぬ。死で逢へるものならば今逢ふて苦しい目をす
るよりまし、が逢へるか、死で又逢へるか。思ふと悲しく矢も楯もたまらなくなつて涙は湧く
一所に死にたい

未練など我身を叱てもこればかりは思切られぬ「では一所に死うか。いや、うれでは親へ濟まぬ、自分にまた此上の苦をせねばならぬ、矢張此儘これでい、あれが此世の見納めだ、未來は知れぬから、事によつたらいついつまでも此限逢はれぬ

せめてあなたを爲に死まする、あなたを思て死にまする、最後の思はあなたですといふ事だけ知らしたい。がそれも出来ぬ、死だとお聞きなすつたらお分になるだろう。イヤ一筆書かうか。書ても届くまい、誰が届けてくれるものか

まかし母様へ譯を言はせに死では——イヤ言ては却て御立腹、泣て

下りて来る音、又あわて、かけ上る音
さては彼奴と飛ぶやうに、次の間の梯子をかけ上ると、目先に血汐
あ、霜夜が半面朱に染て細い手に懐劔を持たま、うつぶしになつて
居る

秋津は飛付て抱起した。暫らく無言で顔を見たが、たちまち手を離し
て死骸は倒れた。秋津も倒れた
生きて居るのか、死なのか。

(畢)

明治二十六年二月十日印刷
明治二十六年二月十一日出版

正價金拾五錢

著作兼發行者 高安三郎

大阪東區道修町四丁目二番屋敷



印刷者 赤川孫兵衛

龍雲舍

大阪東區北濱二丁目三十四番屋敷

2012
700

21

✓

民國二十六年二月十一日出版
第...期

本報...

...